

《控帳》

## 「文学場」をめぐる断想

松本和也著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』

平 浩一 HIRA, Kouichi

過日、書簡類の新資料について原稿を依頼され、関係する「大衆文学」の論文・書籍などを読み返す機会があった。たとえば、尾崎秀樹の調査・研究の幅広さに再度驚嘆するなど、古典的にも称される研究が、いまだ新鮮さを失っていないことを痛感した。桑原武夫は 1950（昭和 25）年の段階で、すでに次のように述べている。

いわゆる高級な文学にしてもそうだが、特にこの大衆文学の問題は、もはやたんなる文学の世界の中だけでは処理できず、ひろく社会の問題との連関において考察されねばならない[……。]。そして、この問題においては質のみでなく、量、さらに質と量との関係を知ることがきわめて大切であるから、これを正しく取扱うためには、まず作品分析と同時に、ひろい社会調査を前提としなければならないであろう。[……。]社会学者、歴史学者側からも取上げられねばならないはずだが、これまたほとんど試みられていないようで、私はその方面の業績をほとんど知らない。

（桑原武夫「大衆文学について」『文学入門』1950 年 5 月、岩波書店）

この提言も、いまだ新鮮さを失っておらず、むしろ「大衆文学」だけでなく、（その流れの「善し悪し」は置いておき）いわゆる「純文学」も含めた、その後の研究状況を予見していたとも言えるだろう。セシル・サカイ（Cécile Sakai）は、この桑原の提言を受けつつ、以下のように指摘している。

純文学と大衆文学の価値的差異が、現在、いろいろな意味で消滅しつつあるのだ。周知のとおり、余暇の多様化、視聴覚化の中で、筆記メディアの存続が危ぶまれるようになったとき、本体論的な問いかけがはじめて可能になる。つまり、文化における書物の歴史的位置、文学の社会的メディアとしての機能、および政治性、等々の問題提起が浮上してくる。ここで、近代文学史の再編成の可能性を見いだすと同時に、純文学の批評手法として練り上げられてきた文芸批評の内容、範囲、方法の再考察も必要になるのである。

具体的には、従来の純文学専用の伝記研究や作品研究が大衆文学にも応用されるだけでなく、内容論を経て、受容研究へと移り変わっている。

[……。]

受容を視野に形成される作品、書物としての文学、消費者、および解釈の創造者としての読者などの現在の主要な研究テーマを観察すると、明らかに「文学」という、近世以来、文化の場において構築されてきたひとつの特別な領域が、その独自性を失いつつ、今まさに、

一般経済の原則のなかに吸収されてゆくのが目に見える。すなわち、「文学」が「文化的生産物」としての扱いを受けるようになってきている。そしてその際、問題になるのが流通のサーキットと量であり、その範囲では、大衆文学も純文学も、まったく同等の基準をもって評価され得る。このような現象が最近の文学研究のなかでもっとも顕著な動向として現れており、ドイツ、イギリス、フランスでは現在発展中の理論である。

（「日本語版あとがき」『日本の大衆文学』1997年2月、平凡社）

以上、あえて長く引用したが、この1997年の指摘も、「一般経済の原則のなかに吸収されてゆくのが目に見える」という部分も含め、桑原の提言とともに、後の近現代日本文学における研究の流れを（やはり、その流れの「善し悪し」は置いておき）端的に言い当てていると言えるだろう。

もちろん、セシル・サカイの指摘は、ブルデュー、特に『芸術の規則』の考え方を基盤のひとつとしたものであり（実際にこの箇所でも、「注」に『芸術の規則Ⅰ』が参照文献としてあげられている）、日本の「大衆文学」研究とブルデューとは親和性が高い。

その意味で、近現代日本文学研究において、いち早く「文学場」という言葉を用いたのがセシル・サカイであったことにも納得がいく。1994年5月の『日本近代文学』（ちなみに記念すべき第50集であるが）を見ると、「大衆文学の形成——大正末期、昭和初期の文学場再編成の特徴——」（傍点ママ）という論が掲載されている。標題の「文学場」という部分に、わざわざ傍点を付していること、論中で、丁寧に「文学場」という言葉を説明していることなどから、この用語が、当時、いかに新しい概念であったかが、あらためて確認できる。

その後、この概念は少しずつ流通していったが、ことにこの一年、頻繁に耳にする（あるいは目にする）ようになった。そのひとつの契機となったのは、松本和也による『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（2015年3月、立教大学出版会）刊行であった。それほど、強い影響力、伝播力を持つ書である。

私自身は、「文学場」という言葉は、今のところ、論文中ではもちろん、会話の中でも、（少なくとも意図的には）用いたことはない。というよりも、意識的に、用いないようにしている。理由は単純で、「文学場」とは、非常に概念規定が難しく、そこを「突っ込まれる」のが怖いからである。フランス語で"champ"、英語で"field"なる「場」という語は、非常に曖昧であり、むしろ曖昧であるからこそブルデューはこの言葉を用いた。たとえばそれは、長谷正人「文学と芸術の社会学」（『岩波講座現代社会学第8巻 文学と芸術の社会学』1996年9月、岩波書店）などでも示されている。ちなみに、ブルデューは「文学場」、「芸術場」という言葉はもちろんのこと、「権力場」、「大学場」など、様々な方面で、「場」（champ/field）という語を用いている。そのため、ブルデューの言う「場」（champ/field）とはそもそも何なのか、それ自体を問うた論も、多く執筆されている（小松田儀貞「ブルデュー社会学における「場」概念についての一考察」『秋田県立大学総合科学研究彙報』2004年3月など）。

では、松本和也はこの複雑な語を、どのように定義しているのか。同書の「序」では、以下のように記述されている。

ここにいう文学場とは、P・ブルデューによる《場 champ》という概念 - アイディアに端を発するものだが、M・フーコーのいう《言説 discours》にもヒントを得て、本書の問題意

識・方法に即して<sup>アプロプリエイト</sup>「流用」したものへとアレンジしている。本書においては個別の作家・作品・トピックだけでなく、文壇といった時に想定される実体的な人間関係でもなく、それらを取り囲む批評言説やゴシップ、その水面下を流れる基底的な力学、さらには流通・（再）配置されていくフローの総体を指す鍵概念として、文学場という用語を用いたい。

（「序 昭和一〇年代の文学場を考えるために」）

ここで、ブルデューの言う「文学場」とはどのようなものであったか、再度立ち返ってみよう。先述したとおり、それは非常に複雑・曖昧なものであり、私に端的に示す力量も無いため、先のセシル・サカイの論を参照してみたい。そこでは、「この文学場という一見奇妙な表現は、仏語の *champ Littéraire* をより正確に和訳するために考えられた翻訳者、石井洋二郎による新語」と紹介された上で、「一般的に使われている文学界という言葉と比較して、文学場は磁場のように、一定の力が作用する同一性質の範囲、という意味を持っている」と定義されている。さらに、「ブルデューの大変興味深い指摘」を「内容論ではなく、形態論として、経済的秩序との関連において非常に暗示に富んだ分析」という点に見出している。特に、「経済（的秩序）」という観点については、ブルデューの他の著書でもその基盤を成していることは、もはやここで触れるまでもあるまい。こうした視座との齟齬から、あるいは、松本和也の定義や書を批判することもできるのかもしれない。すなわち、そのままであるが、「経済（的秩序）」という観点がやや軽視されているのではないか、等々——。が、（自分で指摘しておきながら何だが）そうした批判にも違和感を抱く。

それは後述するとして、「言説」の問題にも少し触れておきたい。先の引用箇所に見られるように、松本和也は「文学場」を「言説」（discours/discourse）という概念と同時に説明している。「言説」という言葉も、特に近年、非常に多義化しており、ここで詳述する紙幅も、また、私自身に簡潔に説明する能力もない。が、いわゆる「言説研究」、「言説分析」という言葉は、近現代日本文学研究において、これまた非常に多彩な形で、思った以上に広く流通している。同書の帯にも、「特定の作家・作品・トピックにとどまらず、それらを取り囲む諸条件ごと同時代の視座から練りあげた問題構成に、メディア調査、言説分析、テキスト読解をクロスさせて論じる。」として、「言説分析」という言葉がしっかりと織り込まれている。

それもあって、同書を「言説研究」、「言説分析」として高く評価する向きもあり、実際に、同書がそうした側面を多く内包しているのも確かであろう。ただし、「言説分析」という言葉が強い意味を持ちすぎ、同書について、その「情報収集（能力）」が、あまりにも前景化・評価されすぎているような心象を思い浮かべ、そこにもまた、やや違和感を抱く。

というのも、本書自体、ひとつの「情報」<sup>ジャーナル</sup>として消費できない側面を持っているのは確かなのだ。個人的には、いわゆる「素材派・芸術派論争」を調査せねばならない機会があり、その際、本書収録「第18章 富澤有為男『東洋』の場所——素材派・芸術派論争をめぐる」の初出（「富澤有為男『東洋』の場所、あるいは素材派・芸術派論争のゆくえ」『文芸研究』2008年3月）を読んだとき、そのように痛感した。最初は、様々な「情報」<sup>ジャーナル</sup>が網羅された論として読み、実際に、その点でも非常に便利であったのだが、繰り返し読むごとに、同論の位相が、もう数段深いことによりやく気づかされた。それは、私の理解力の足りなさからくるのだろうが、ただし、本書の「序」、すなわち先の引用箇所、で「文学場」を定義するにおいて、「言説」という言葉を強調するのは、正直なところ、非常に損な気がした。どうしても、「言説分析」というイメージば

かりが強まってしまい、そこが前景化されてしまうからだ。

そう考えると、先に引用した「文学場」を定義した箇所は、あえて「経済（的秩序）」に関して中途半端な形で触れることなく、「アイディアに端を発する」、「<sup>アプロプリエイト</sup>流用」したものへとアレンジしている」と真摯に記し、また、批判や誤読（？）覚悟で意識的に「言説」という言葉を織り込みながら、「ヒントを得て」という言葉で実直に説明しているところに、著者の誠実さがあるのだろう……か……？

——いや、そんな油断は、許されない。そんな安易な「人格主義」に回収して、誤魔化されてはならない。

「昭和一〇年代の文学場を考える」という、やや口語的な標題。この場合の「考える」は、言うまでもなく、「昭和一〇年代の文学場」というフレーズに掛かっていると同時に、「文学場」というタームにも掛かっている。「文学場」という概念を、もちろん、近現代の日本文学研究という「場」(champ/field)において、ブルデューの本当の意図どおりに当てはめる必要はないだろうし、そもそも、それ自体が困難であろう。むしろ、あらためて「文学場」とは何であるのか、それを問い続けること自体が、特に今後、なんらかの研究の道をきりひらいていく。

そう考えたならば、ここまで熟々と述べてきたこの文章、そして、気がついたらこうした文章を書いていた私の行為自体、著者の思惑どおりなのである。私自身が、「文学場」とは何なのか、その難問を、悶々としながら必死でここまで「考え」、書いてきたその行為自体が、すでに、著者が投げかけた問いに絡め取られ、著者の投げかけた、ある種の「磁場」に入っているのである。肯定的にせよ批判的にせよ、この一年、「文学場」という言葉をよく耳にする（目にする）ようになったのも、ある意味では、著者の思惑どおりだと「考える」。

研究者の端くれとして、私自身、超然と俯瞰していたつもりが、まったく気がつかないうちに、著者の「磁場」のなかで藻掻いていた（藻掻いている）自分を、たいへん口惜しく思うと同時に、たいへん甘美な体験のようにも思う。後者の感情を優先させ、本書の刊行を、ここでは素直に、非常に嬉しく思ったことを記し祝しておきたい（ちなみに、前者の感情から、やはり当面、「文学場」という言葉自体は用いないでおこう、と思う）。最後に、繰り返すならば、その標題ひとつとっても、本書が、ひとつの「<sup>ジャーナル</sup>情報」として消費できるような類いのものでないことは、いくら強調しても足りない。やはり、油断はしてはならないのである。

(2016.9.17)